

佳作

『チップス先生、さようなら』 ジェイムズ・ヒルトン著 白石朗訳

文学部 文学科 1年 有馬武蔵

学校の誰にも愛される人だった。受け持った生徒ひとりひとりの顔を覚え、すぐにどんな人だったかを思い出してしまう。ひとたび授業を始めれば、軽妙な洒落を飛ばして教室を笑いの渦に巻き込む。本書にはそんな「先生」のユーモアあふれるエピソードが散りばめられ、読む者を暖かな気持ちにさせてくれる。

イギリスのパブリック・スクール、ブルックフィールド校の向かいに住むひとりの老人、チップング。「チップス」という愛称で知られ、60年余りをその学校の教師として過ごした彼は、楽しかった日々をゆっくりと振り返る。やんちゃだが愛すべき学生たちのこと、妻と話したさまざまなこと、長い戦争による混乱した時代のこと。そして、職を退いてもなお交流は続く……そんな老教師の生涯を描いた、イギリス文学の名作である。

しかし、チップスはなぜみんなから愛されていたのか。先に述べたようにユーモアあふれる人物ではあったが、授業の内容は古臭いものだったし、昇進などの名誉もほとんど得ることはなかった。だが、チップスにはどんな教師にもないような持ち味があった。それは、誰に対しても、どんな状況においても＜変わらない＞生き方を貫いたことだ。

ほかの物語で描かれる多くの教師たちは、教育の現場を見て「今の状況を変えなければならない」と思って周りとぶつかり、その中で自分自身も変化していく。ところが、チップスは違った。彼は長い教師生活の中、そのように環境を変えようとはせず、むしろ自分自身が＜変わらない＞ことを守りきった。新しい校長がチップスの古臭さを責めたときも、大戦で学校に被害が及んだときも、彼はあいかわらずの授業を続けた。その理由は、「バランス感覚を守ること——それが一番大事だった。世界のほとんどが、その感覚をうしなっている時代だった」(P. 102)という思いに現れている。

誰に対してもいつも通りでいることは、この物語の時代に限らず難しい。自分なりの想いを持って社会に出ても、周りの環境がそうさせてくれるとは限らないだろう。だからこそ、その中で＜変わらない＞ことに価値がある。何事にも動じず、いつも親身に寄り添うようなチップスの姿は、人々にとって何よりも支えとなり、それぞれが生きるための指針になってくれるのだ。

特別な才能がなくてもいい、無理に合わせようとしなくてもいい。惑わされることなく、ただ自分がいつも通りでいること。チップス先生は、今を生きる私たちにかげがえのない生き方を教えてくれる。